

冲

7  
2020

肇庆学院(冲)



初

朴

能村 研三

不自由を過ぐす

咲き満ちてむしろ暗さの花の蔭

鍬の柄を杖にして聴く百千鳥

清明や遠景にみる鍬さばき

照り降りや落花塗しの女坂

飛花落花禍々しきを祓ひたり

川越して変はるしきたり若葉冷

棕櫚繩を濡らして使ふ垣手入

湯がかれて筍の身のほの白し

今朝咲きし初朴に礼深くせり

家籠りの沙汰に卯の花月夜かな

徳川家康の遺訓に「不自由を常と思えば不足なし」とあるが、この三か月、沖の各例会の会場での開催ができず、日常からすれば不自由な環境となった。幸い紙上句会という方法で各句会の幹事役の皆さんの献身的なご尽力により、多くの方々の参加を得て交流の句会が持てた。主宰、副主宰の選に加えて蒼茫集の代表の方の選ももろうことになったが、いつものような参加者全員の互選は行うことができなかつた。日常とは違う不自由がここにもあつたわけだが、これは家康の遺訓に倣つて我慢するしかない。

俳句の世界では不自由と言ってもこれくらいのことなので、我慢ができる範囲なのだが、世の中では、この不自由が明日の生活にも影響を及ぼし深刻な事態に陥つているところもある。

そもそも「自由」とは、気ままなこと、放縦を意味しているが、仏教で「自由」とは、なにもものに捉われない境地のことを意味する。

人間はこれまでに経験したことの

ない有事となれば、短い時間の間にいろいろと考え出すもので、これまでの型といったものにあまりとらわれず、その型を打ち破つて新しい知恵と勇気が出てくるものであることを実感した。

ITを利用したテレワーク、オンライン会議なども世間では急速に取り入れられたり、九月入学ということも俄かに議論され始めた。

俳句は昔から連衆が集まる座の文学と言われ、いわゆる「三密」の中でも「密接」「密集」が座を形成する上で必要とされるので、悩ましいことである。

しかしながら、連衆が皆健康でいることがもつとも大事なこと。今しばらくは、通信による句会の限られた選の中で自問自答しながら句を推敲し、不自由を発条としていかなければならないのだろう。

能村 研三

## 青葉木菟 森岡 正作

木洩れ日の濡れてゐるやう柿若葉  
竹皮を脱げり校歌は肩を組み  
隠れ読む文方丈の木下闇  
若鮎の刃金びかりに奔りけり  
青葉木菟世の趨勢を推し量る  
夢二にも描かせてみたき虞美人草  
一斉に鳴く雨蛙もつと鳴け

早朝の清澄な空気を突き抜けてくる郭公の声は心地良い。眠気交じりのもやもやした頭の中も一気に軽くなる。子供の頃は朝早く起きて、よく小鮎釣りに出掛けた。まだ区画整理されていなかった田圃には、至るところに沼があり小川があった。釣竿を下ろし始めて、じっとしている時に聞こえてくるのが、決まって郭公であり、今でもその声は耳に残り、頭にも胸にも残っている。

ふと、登四郎先生ならあの声をどう詠んでいるだろうかと思った。自分の記憶にはないので、先生の全集を開いて、頁をずうっと捲つて上五の語句を見た。ない、ないのである。郭公どころか時鳥、鶯までもない。森の中の鳥は殆ど先生の句の上五には登場しないのである。

そして、ようやく見つけたのが先生の若い時の句で、〈今日の授業に誤ちありし青葉木菟〉である。夜中の思案中、先生に寄り添うようにして鳴く、言わば生活の中の青葉木菟である。私にもよく分かり、さすが先生の句と思うが、郭公の句も欲しかった。

## 飛鷹選評



能村 研三

陽炎をつきぬけてまた陽炎へる 小倉 征子  
小倉さんは玄界支部の句会に参加されている方で、すでに句集も編まれているベテランの方である。ゆらゆらと向こうの景色が揺れる陽炎は、陽射しに暖められた地面から立ち上る空気に光が不規則に屈折して起こる現象で、春たけなわの頃によく見られる。今年の春はコロナ禍によりだれもがいつもの日常が失われ気の晴れない日が続き、心の中の陽炎も晴れなかった。自粛生活がこのほか長く続き陽炎のトンネルをなかなか抜け出せないでいる。

国難をでんと構へて山笑ふ 石橋みどり

石橋さんも小倉さんと同じ九州の方で熊本から投句をいただいている。新型コロナウィルスの感染は二、三か月のうちに世の中を一変させてしまった。まさに国難と言えるべきことで、人々の間に重くのしかかった。しかし、自然の力は偉大で、春爛漫の花時には綺麗な花を咲かせ、鳥たちもいつもの春と同じように囀りを聞かせてくれた。国難を乗り越えるには自然に倣

いでんと構えて過ごすしかあるまい。

菜種梅雨敢へて明るき句を詠まな 坂下 成紘

坂下さんは能登の七尾市の方である。コロナ禍による長く続いた自粛生活は、人々の心を鬱々とさせた。しかしこのような時こそ、前向きな心をもって明るい句を詠んでいかなければならない。今年の春は雨の日が多く菜種梅雨と思われる日が続いたが、からっと晴れ上がった初夏の天気が望める日も近いことだろう。

逆打ちの四国遍路やいごつそう 宮岡 弘

遍路で札所をお参りすることを「打つ」といい、一番札所から八十八番札所を時計回りにまわることを「順打ち」、逆に反時計回りにまわることを「逆打ち」という。今年は閏年だが、この閏年に「逆打ち」をすると弘法大師に会えると信じられている。愛媛県から高知県に入った四国遍路も頑固で気骨のある「いごつそう」に出会った。

初蝶の翅の縮みを解きほぐし 浜崎喜美子

蝶の羽化する瞬間を捉えた句であろうか。羽化寸前の蛹の中ではいくつもの髪に窮屈に折りたたまれていた翅が、羽化と同時に張りもち、やがて、すっかりきれいに広がって皺ひとつない翅となる。蝶が誕生する瞬間をよく描写した句である。

# 能村登四郎の軌跡〔23〕

能村 研三

## 火取虫男の夢は瞑るまで

『易水』6

火取虫は火蛾とも言い、夏の夜、灯火に突進してくる蛾のこと。「飛んで火に入る夏の虫」という言葉もあるが、火取虫の灯に接しての狂いようには、後ずさりしたくなるほどの凄さがある。登四郎の俳句人生は、伝統文芸の系譜につらなるという強い自負と信念とが、つねに自己変革を促し、俳句の新しみを追求した。「俳句が好きというより、俳句を作らないではいけない。」と言う登四郎はその一方では多くの新鋭・精鋭を輩出させたことも大きな業績であった。瞑るまで自分の夢を追い続けることが出来た幸せな人生であった。

## 東京をふるさとにもち春惜しむ

『世種』平7

「沖」は創刊二十五周年を迎えた。この頃になると登四郎も体力的にもやや衰えを感じることも多くなった。登四郎は今では上野池之端と呼ばれる谷中清水町で生まれ、七歳から成人になるまでを田端で過ごした。市川には六十数年、東京で暮らした年月の倍の年月を送ったわけだが、常に自分は東京人であるという自負を持ち続けた。自らの家が市川にありながらも本籍は「東京都北区田端四七八番地」であった。東京の谷中で生まれ、その谷中に葬られていることも喜んでいては違いない。〈谷中生姜の名に残りたるわが生地〉。

## すさまじさの奥のやさしさ絵にこめて

『世種』平8

萩、津和野を旅した時、香月泰男美術館を訪ねた。香月泰男はシベリア抑留の体験をもとにした洋画が代表作である。香月はどんな過酷な状況にあっても、光明を追い求め、生き抜こうとする生命力あふれる作品を描いている。香月泰男も登四郎も明治四十四年生まれで同じ時代を生きた人で、登四郎は自らの人生を重ね合わせたのだろう。洋画のほか、廢材を利用して作った「おもちゃ」と呼ばれるオブジェも展示されていた。登四郎は洋画家に憧れた時代もあり、子供たちに人形なども手作りしたので共感を呼んだのだろう。

## 双翼をもがれし年を逝かしむる

『世種』平8

この年女流双壁と言われた北村仁子と坂巻純子が相次いで亡くなった。二人はお互いの性格や句風を異にしながらも登四郎の片腕として「沖」を支えてくれた。北村仁子は「沖」新人賞、同人賞、沖賞の三冠をとった作家、坂巻純子は「沖」創刊前からの子飼いの同人で「沖」で初めて俳人協会新人賞を受賞している。登四郎は北村仁子を悼み〈春疾風掌中の珠奪ひ去る〉という句を、坂巻純子には〈露の夜のこよなき弟子を見送りし〉という句を作っている。「沖」の宝を失った登四郎は「かけ替えもない大きな穴が開いた」とその死を嘆いた。



# 蒼茫集



草の王

大畑善昭

真只中

菊地光子

\*いかな徳積みてその名の草の王  
人に憑くウイルス夏に入りてなほ  
僧われの日焼けし鼻の笑はるる  
熊ん蜂尻より出づる蜜を吸ひ  
忘れゐて蚊の出る頃の飛蚊症  
菖蒲湯にさすれる五体投地胼胝

\*春愁の真只中の膝がしら  
花吹雪お納戸色の濠の水  
城壁の石の刻印散松葉  
初夏やアダムの像に浮く肋  
葉桜となりて風音戻りけり  
差し潮に膨らむ河口夏つばめ

沸

点

千田百里

奥座敷

辻美奈子

大路ゆく車夫の筋力五月来る  
胸中に来し方咲かせレース編む  
目には青葉まだまだ籠る日々憶ひ  
籠り居の爪立てて剥く夏みかん  
プレートに残る校歌や花は葉に  
\*我にまだ沸点あらばダリアの炎

ひと家族まとまるやうに残花かな  
魚になる途中で道を違へ春  
\*創刊の頃の薄暑の奥座敷  
万緑や筆より返りくる呼吸  
檜大樹梅雨の走りのうすけぶり  
散るときの薔薇はすべてを放棄せり

絵硝子

荒井千佐代

絵硝子に主の血の色や麦の秋  
\*どの坂も海より生まれ花朱纒  
夜の弥撒へ南風の海坂のぼり切り  
花みかん日々の飽食罪に似て  
髪洗ふ身裡の水を傾けて  
銀漢の支流のひとつ被爆川

少しづつ

甲州千草

蝌蚪に脚抵抗力をつける水  
少しづつ憂き心消ゆ白牡丹  
\*ぼうたんの満足さうに崩れたり  
包丁の置き場を探す春の雷  
まくなぎと共に市役所裏通り  
日と月のかがやきをもて蛇の衣

まつ新な

田所節子

太陽の色をさづかり蝶生まる  
\*まつ新な空気の通ふ植田かな

かひやぐら海上に浮く未来都市  
あたたかし田の中にある父祖の墓  
蝌蚪の国見えないものに怯えをり  
蒲公英の絮とび計画反故となる  
螺旋形  
大沢美智子

惜春やバカラガラスの淡き影  
鳥雲に入る義経の腰越状  
臍に風のさらりと更衣  
誰ぞ棲む家のかたちの蔦若葉  
朝曇シェフの出てゐるハーブ畑  
\*明け易し身に頸椎てふ螺旋形  
正論  
栗原公子

\*正論はおよそ屈藤ゆれて  
古九谷の皿の濃みどり春闌くる  
春逝くや複製の鍵複製し  
主語のなき会話かしまし蝶の昼  
陽炎を立漕ぎの子ら突つ走る  
聖五月玉虫色の鳩の首

# 潮鳴集



たうたう 町山公孝

江戸川は二手に別れ花菜風  
たたたと屋根走りゆく春霰  
小面のまなこの奥の五月闇  
鯉幟の大き目玉を畳みけり  
\* 大利根のたうたう茅花流しかな

桜 貝 栗坪和子

\* しののめの色のはじめや桜貝  
春の雪紅型の帯選りにけり  
古唐津の砂目荒らか緑さす  
摘み終へて土筆の頭揃へたり  
黒松も榎もますらを青田風

ざわざわと 村上葉子

まるまると桜の国に生まれけり  
天球の今ここに咲く犬ふぐり  
伸びすぎて土筆曲つてみたるかな  
見えぬ敵桜隠しの雪となる  
\* ざわざわと春ゆるゆると糸ぐるま

立 夏 大矢恒彦

一頭といふには軽く初蝶来  
サックスの放つ音符の野に遊ぶ  
\* ねんごろにわが体積を菖蒲風呂  
平穩のガラスのやうにある立夏  
穢れなき空切り結ぶ夏つばめ

## 沖作品



## 能村研三選

ガレのランプ灯れり港町おぼろ 福岡 小倉 征子

\* 陽炎をつき抜けてまた陽炎へる  
しばらくは頬杖雨のさくらかな  
城址や胸押ししてくる飛花落花  
水音や散るを泳ふる山桜

熊本 石橋みどり

\* 国難をでんと構へて山笑ふ  
終息の見えぬコロナも臍かな  
在宅の今出来る事豆の花  
雑念を消す草取にある力  
若草の葉先に風のリズムかな  
\* 菜種梅雨敢へて明るき句を詠まな  
もてなしの殊に芽独活の酢味噌和  
時の疫の収束願ふ鯉幟  
拝殿の神事で済みぬ山車祭  
巡行の山車無き街の空蒼く

石川 坂下 成紘

先付に添ふ花二輪坊の宿 神奈川 宮岡 弘

行く春や読経の潤む女人堂  
貴船まで上がりて洛の春惜しむ  
くるぐると春雷一閃ビル谷間

\* 逆打ちの四国遍路やいごつそう  
\* 初蝶の翅の縮みを解きほぐし 千葉 浜崎喜美子

揚雲雀千切れ雲などくすぐりて  
卯波立つたびに記憶の甦る  
振花の螺旋の小花生き生きと  
暮れぎはの一瞬眩し新樹光  
朝まだき靈気に満ちて花の精  
万象の力均 衡 朝 桜  
爛漫の花に魂捧げたし  
\* 身に余る恵みのやうな花吹雪  
夕映の色を重ねて散る桜

牛島 晃江